



複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム

＜日本古代学教育・研究センター＞明治大学大学院文学研究科史学専攻・日本文学専攻

ニューズレター 第 18 号

◆巻頭言

明治大学文学部長・総括責任者 石川日出志

トルファンでの経験

「石川さん、こんな所で何してんの?」。声の主は、明大考古学で 14 学年先輩の雪田さんご夫妻。1988 年 8 月、中国新疆ウイグル自治区トルファンの緑洲賓館。NHK の特集番組によって空前のシルクロードブームが起こり、80 年代後半には多くの日本人が西域ツアーに出かけた。雪田さんもその途中なのだという。

私は、政経学部小堀巖先生を代表者とする国際学術研究「カナート水利体系をもつオアシス社会の比較研究」の一員としてここに滞在している。作業ズボンに長袖シャツ、頸にタオルを巻き、腰には野帳等を容れる愛用の釘袋、そして地下足袋。雪田さんは、私が発掘していると思ったのだろう。しかし、当時はまだ中国で他国考古学者の発掘は許可されなかった。それでも、明大から測量用トランシット・三脚・箱尺セットを持ち込み、郊外・五道林にある総延長 2.5km の坎井 1 本に 72 基ある縦井戸間の距離と標高差、そして各縦井戸上面から地中水路の水

面までの深さを測り、坎井の断面図を作成した。青銅器時代の紅陶の破片も見つけ、暗黙裡に考古学もした。

また、郊外のウイグル族の村々を訪ね回り、坎井をどのように掘るのか、どんな道具を使うのかや、水利運用の実際を聞き取りする。村に着くと、羊 1 頭が塩茹でされ、西瓜・ハミ瓜・葡萄の山が各自に供される。翌年度の調査は、天安門事件のあおりで現地はまだ冬の 3 月となり、酷暑の夏との著しい対照も実感できた。

近現代の乾燥地帯の水利体系という異分野の海外調査を経験できたことはとてもよい刺激となった。ウイグル族の農村をつぶさに観察し、また街中では民族問題も間近に体感できた。農村に生まれ育ったことや、20 代半ばにユーラシア考古学の基礎を齎ったことも活かされた。子供の頃から 30 すぎまでの経験がそこに交響し合い、その後の考古学思考の下支えになっていると感じる。複眼的って面白い!



1988 年 8 月 6 日 トルファン郊外勝金郷（石川撮影）
この子らは当時の私とほぼ同年齢になったはずである。

目次：

表紙 巻頭言	1
フィールドワーク	
高麗大学校プログラム	2
明治大学・高麗大学校交流行事プログラム	4
奈良（総合史学研究Ⅱ）プログラム	4
特別公開講義紹介	
鞠智城東京シンポジウム	5
2015 年度プログラム（春学期）の軌跡	5

◆フィールドワーク

◇高麗大学校プログラム

実施日：2015年9月8日（火）～9月11日（金）3泊4日

参加人数：学生5名、引率教員5名、合計10名

実施場所：韓国・ソウル市（高麗大学校）

＜高麗大学校プログラム・フィールド調査日程概要＞

9/8 羽田空港より出発、金浦空港到着。昌徳宮見学

9/9 水原華城散策、及び水原華城博物館見学。湖巖美術館見学

9/10 高麗大にて学術交流大会

9/11 国立中央博物館見学。金浦空港より出発、羽田空港到着



◇参加記

博士前期課程 1年 猪瀬綾子

2015年9月8日から11日の4日間にわたり、今年度の高麗プログラムが実施された。静かに降り続く雨の東京を出発し、ソウルに到着すると、雲一つない青空が広がっており、天候にも恵まれた日程であった。今年度の参加者は、学生が文学から4名、史学から1名、引率の先生方は5名の計10名であった。8日、9日、11日は史跡、及び博物館・美術館を回るフィールドワークを中心とした日程で、10日は高麗大学校との学術交流大会が行われた。どれも私にとって非常に貴重な体験であり、研究者としても人としても成長できる契機であったと感じている。では、今年度の高麗プログラムの詳細を、順を追って記していきたい。

8日は、昌徳宮を見学した。1405年に離宮として創建された昌徳宮は、文禄の役の際、民衆の焼き討ちに遭い、

すべての宮殿が全焼してしまっている。1610年に再建され、以降1868年までの約260年間、正宮として使用された。その後も何度か火事の憂き目に遭っているが、その度に再建され、1997年には、世界文化遺産に指定され、現在では観光地としても多くの人を集めている。最古の門であるという敦化門をくぐり、少し進むと仁政殿に出る。この仁政殿は、昌徳宮の正殿であり、歴代の王が政務を行ってきた建物である。仁政門を抜けると急に開ける広い空間にも驚かされるが、やはり建物の大きさに圧倒される。時を隔てた今でも、王の偉大さや、権威が感じられる。仁政殿の前には、役人たちが並ぶための身分が記された版が並んでおり、役人が一堂に会した際に王が眺めた景色はさぞ壮観であったろうと想像された。次に王の生活空間であった熙政堂と王妃の生活空間であった大造殿に向かった。



た。建物にはどちらも、正殿であった仁政殿と変わらない鮮やかな装飾が施されていた。日本の彫刻による装飾を見慣れた目には、韓国の塗装による装飾は珍しく映った。用いられているのは、赤・青・黄・緑・白とどれも目に鮮やかな色であるが、これは「丹青(タンチョン)」という韓国の伝統色で、各色は「東西南北と中央」を表わすのだという。日本では、伝統色というと数え切れないほどの四季に合わせた色彩が思い浮かぶが、韓国では、この5色が基本の軸として在るようである。この色彩感の在り方の違いは、宮廷女性の文化圏をテーマとしている自分には非常に興味深く感じられた。

9 日は水原華城に向かった。水原華城は、第 22 代国王・正祖が、政略に巻き込まれ王位に就かないまま命を落とした父・思悼世子の墓を水原に移し、守りを固めるために城壁や塔などを造ったものである。1794 年 1 月に着工し、1796 年 9 月に完成した。その建築は、西洋の建築技術を中国経由で取り入れたもので、当時の技術の粋を尽くしたものである。一時は水原華城への遷都も計画されていたが、正祖の崩御によりその計画は見送られたという。以降、経年劣化や朝鮮戦争により大きく破損したが、



1975 年から補修が始まり、1997 年に前述の昌徳宮と共に世界文化遺産に指定された。正祖の孝心と権力・経済力が現在にも伝わる遺跡である。私たちは城壁に沿って、蒼龍門のあたりから華虹門まで散策した。水原華城の城壁は非常に特徴的で、石材と煉瓦が組み合わせられた独特の積み方をしている。これは現在の技術では再現することは難しく、補修の際の課題ともなっているのだという。その城壁が造られた過程は、続いて向かった水原華城博物館で詳しく知ることができた。木材や石材、煉瓦の搬入経路や、城壁を積み上げるために使った道具が展示され、作業の効率を上げるために、作業員となった民衆に賃金を払ったことなどが説明されていた。展示の中で一つ驚いたのは、姫路城についての展示がなされていたことであった。水原華城が造られる際、守りの堅さで知られる姫路城が参考にされた部分もあったのだという。改めて日本と韓国の、隣国ならではのつながりを感じた瞬間でもあった。

続いて向かったのは、湖巖美術館であった。湖巖美術館には、サムソン電子の創業者・李秉喆氏の美術コレクションが展示されている。展示の中心は絵画で、多数の貴重

な韓国伝統絵画を所有している。美術館自体も非常に豪華な造りで、館内に入る前から目を楽しませてくれた。印象に残っているのは、数多く展示されていた虎の絵画であった。目のギョロツとした非常に力強い虎の数々であったが、同時にどこか戯画的にも見える。日本では虎というと荒々しいイメージであるが、韓国では人間に近い存在として捉えられていたといい、それが描き方に影響しているのだという。水原華城では、隣国同士の交流や共通点を見出せたが、こちらでは同じモチーフでも捉え方が大きく異なるという文化の差を感じ、非常に興味深かった。

10 日は高麗大との学術交流行事であった。今年で 8 回目となる高麗大との学術交流大会は、午前は日韓双方の先生方お二人ずつの講演、午後はこちらも日韓双方の、学生 5 名ずつの発表と質疑応答という形で進められた。普段は聞く機会の少ない他分野の研究について聞いたこと、また他分野の研究者だからこその視点からの助言や質疑応答は、学ぶ点が多かった。自らの未熟さを再認識する結果ともなったが、同時に今後の明確な目標ともなった。非常に有意義で充実した一日であった。

最終日は国立中央博物館に向かった。時間の制約により、展示をゆっくり見尽くすことができないのは心残りであった。その中でも印象に残っているのは、ハングルの活字であった。今まで漢字とかなの活字しか見たことがなかったために、ハングルの活字を見たときは少し感動した。最後に韓国ならではの展示をじっくり見ることができたと感じる。

これまでどうしても国内だけに目が向きがちであったが、今回の高麗プログラムに参加したことで、外から見た日本や、海外との比較といった、新たな視点を養うことができたと思う。

最後に、お世話になった先生方、先輩方及び関係者の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げ、結びとさせていただきます。



◇明治大学・高麗大学校学術交流行事プログラム

日 時：2015 年 9 月 10 日（木）

場 所：韓国・ソウル市（高麗大学校）

開会式

開会辞 鄭雨峰（高麗大 海外韓国学資料センター）
李再薫（高麗大 文科大学長）
石川日出志（明治大 文学部長）

基調講演

第1 講演 「漢委奴國王」金印と四夷印
第2 講演 『文集』と『白氏文集』
第3 講演 日本における五山山水図（書斎図）の詩画軸と朝鮮使臣の題詩
第4 講演 女優と醜聞—土月会の女優たちとスキャンダルのジェンダー政治—

大学院生発表

第1 発表 女帝の婚姻と皇位継承
第2 発表 5 世紀後半における加羅国の成長と帯山城戦闘の性格
第3 発表 『世尊寺法書』における「琵琶引」本文についての試論—「源氏物語」古注釈と比較して—
第4 発表 「貧女養母」条に見られる売身の仏教的受容の脈絡と意味
第5 発表 『とはずがたり』の女衆—『源氏物語』受容の政治的意図—
第6 発表 李世輔の「農夫歌」を読み直す
第7 発表 15 世紀における朝鮮—安南の使者の交流様相—
第8 発表 18 世紀朝鮮知識人の『和漢三才図会』受容について—『蜻蛉国志』に見える日本書籍記述を中心に—
第9 発表 知識の植民化、抵抗の（不）可能性—廉想渉の『真珠』を中心に—
第10 発表 福永武彦における暴力的表象

閉会式

閉会辞 李亨大（高麗大 民族文化研究院副院長）
牧野淳司（明治大 文学部）



石川日出志（明治大 文学部長）
神鷹徳治（明治大 文学部）
沈慶昊（高麗大 漢字漢文研究所長）
李相雨（高麗大 国文学科）

桜田真理恵（明治大） 討論：朴鍾旭（高麗大）
辛受陳（高麗大） 討論：桜田真理恵（明治大）
千葉仁美（明治大） 討論：鄭章淳（高麗大）
申虎林（高麗大） 討論：千葉仁美（明治大）
猪瀬綾子（明治大） 討論：尹枝芽（高麗大）
申性桓（高麗大） 討論：猪瀬綾子（明治大）
鄭乃源（高麗大） 討論：朴知恵（明治大）
朴知恵（明治大） 討論：呉ボラ（高麗大）
李萬英（高麗大） 討論：木下幸太（明治大）
木下幸太（明治大） 討論：朴炫翼（高麗大）

◇奈良（総合史学研究Ⅱ）プログラム

実 施 日：2015 年 6 月 5 日（金）

参加人数：学生 8 名、引率教員 4 名、合計 12 名

実施場所：奈良文化財研究所



◇参加記

博士前期課程 1 年 佐藤里香

総合史学研究Ⅱでは学内での講義が主であるが、文学・文献史学・考古学など各分野を専門とする先生方のもと、それぞれの学問を専攻する学生たちが受講している。そのため、異なる分野からの意見交換ができる貴重な時間ともなっている。今回は実際に奈良県に赴き、史跡を巡ることで古代の人々の生活様相を垣間見る機会を得ることができた。

巡見したのは奈良文化財研究所の遺物整理棟をはじめ、平城宮跡（第一次大極殿復元建物、特別名勝東院庭園）や、長屋王邸跡、平城宮左京三条二坊京跡庭園、頭塔、そして最後に、京都府にある恭仁宮跡、山城国分寺跡など、奈良時代を中心とした史跡や名勝であった。

古代の人々の姿を知るためには発掘調査を行うことで土の下に眠る遺跡を掘り起こすことも大事である。だが、その後にどのようにして公共のために調査の結果を知らせていくかも、重要なことだ。訪れたのは、発掘調査が行われている現場や出土資料の整理作業場、そして、調査結果をもとに建物を復元した史跡などと、発掘調査における一連の過程を追うことができる場所ばかりであった。

奈良文化財研究所の遺物整理棟では出土資料である木製品の整理作業の実態を見せていただいたうえに、関係者の方々からお話をうかがうことができた。また、政治の中心地であったこともあり、木製品だけでもその資料数は莫大で、それだけの数を限られた時間と人数で行っているなど、大変な作業であることを知ることができた。



また、平城宮跡の第一次大極殿復元建物では、調査結果をもとに、いかに当時の姿を表現するか、その時代の技術を復元するために研究の試行錯誤を重ねたうえで現在の形に再現されていることがわかった。大極殿から見下ろす風景は奈良時代の中心であった天皇が見ていた風景でもあり、感慨深いものがある。これからさらに復元作業は進んでいくということであったため、今後どう平城宮跡が現代によみがえっていくのか期待したい。

最後に、案内をいただいた井上和人特任教授をはじめとする各先生方や現地でお世話になりました関係者の方々に感謝を申し上げます。

◆特別公開講義紹介

◇鞠智城東京シンポジウム

日 時：2015 年 9 月 6 日（日）

場 所：明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール

テーマ：「律令国家と西の護り、鞠智城～古代山城の中での鞠智城の役割・機能を考えるとともに、東北の古代城柵と比較する～」

2015 年 9 月 6 日（日）、明治大学日本古代学研究所と熊本県主催の鞠智城東京シンポジウム「律令国家と西の護り、鞠智城」が、アカデミーホールで開催された。熊本県副知事と吉村教授の開会挨拶のあと、熊本県教育委員会の西住欣一郎氏による鞠智城の概要説明、岡田茂弘国立歴史民俗博物館名誉教授「鞠智城と古代日本東西の城・柵」、赤司善彦福岡県教育庁文化財保護課長「古代山城の建物－鞠智城と大野城・基肄城」、加藤友康明治大学特任教授「平安期における鞠智城」の各講演が行われ、ついでパネルディスカッションに移った。募集直後に定員に達するなどの盛況さで、ホール2階を埋め尽くす千人以上が参加。南西プログラム参加の院生が受講した。



（吉村武彦）

◆ 2015 年度プログラム（春学期）の軌跡

2015/4/3	新入生ガイダンス
2015/4/24	運営委員会
2015/7/10	運営委員会
2015/9/1	高麗大学校プログラム事前ガイダンス
2015/9/6	鞠智城東京シンポジウム
2015/9/8 ～ 11	高麗大学校プログラム（3泊4日）

明治大学 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

日本古代学教育・研究センター：猿楽町第二校舎 3 階 TEL・FAX：03-3296-4492

E メール jkodaken@meiji.ac.jp

ホームページ http://www.meiji.ac.jp/dai_in/arts-letters/jkodaken

教務事務部大学院事務室：グローバルフロント 5 階 TEL：03-3296-4143 FAX：03-3296-4352